

映画で見るアメリカの苦悩（と栄光？）

湊 一樹

二〇〇六年アカデミー作品賞を獲得した映画『クラッシュ』のあらすじを説明することは容易ではない。なぜなら、明確な主人公が登場する訳でもなければ、初めから終わりまで一つの物語が展開される訳でもないからである。あえてあらすじを説明するならばこうなるだろう。「天使の街」ロサンゼルスを舞台に、それぞれの登場人物が、それぞれの苦悩を抱えながら、それぞれの物語を展開し、そして、何の接点もなかった物語と物語が交錯し、新たな物語が展開して行くと。映画評論家ではない私には、このくらいの解説が精一杯である。その一方で、この作品が扱う題材を説明することは簡単だろう。アメリカ社会に根深く残る肌の色に基づく差別・偏見、そこから生まれる「優越感」と「劣等感」とそれが入り混じった複雑な感情、断ち切ることのできない貧困と犯罪の連鎖……。

この映画を観ている間、何とも言えない不快な気分にも何度か襲われた。描写やセリフがあまりにも生々しいということは理由のうちのひとつだろう。しかし、もっと重要な理由は、私が知らなかった、もしくは知らうとしなかったアメリカ社会の「暗黒面」を、これでもかこれでもかと有無を言わず見せ付けられたからではないだろう

か。『クラッシュ』は、それほど衝撃的な作品だった。

最近のハリウッドでは、『クラッシュ』に代表される、アメリカが抱える深い闇を描き出す社会派の映画が次々と製作され、高い評価を得ている。例えば、『クラッシュ』とともに作品賞にノミネートされた作品には、『カポティ』、『ブロークバック・マウンテン』、『グッドナイト&グッドラック』、『ミュンヘン』と硬派の映画が揃い踏みした。

さらに、一部の好事家のための存在にすぎなかったドキュメンタリー映画が、映画界で賞賛されるにとどまらず、興行的に大成功を収めているのである。コロンバイン高校での銃乱射事件を題材に、銃社会アメリカの異常性に警鐘を鳴らした、マイケル・ムーア監督の『ボウリング・フォー・コロンバイン』。同時多発テロへのブッシュ政権の対応を痛烈に批判した、同監督による『華氏九一一』。一日三食マクドナルドのメニューだけで一カ月間生活するという無謀な実験を通して、アメリカ社会に蔓延する肥満の問題に迫った『スーパースイズ・ミー』。太平洋戦争、キューバ危機、ベトナム戦争での体験から得た教訓を、ロバート・マクナマラ元国防長官自身が語る

『フォック・オブ・ウォー』。

これらの映画を観て痛感するのは、唯一の超大国アメリカが抱える問題は、我々の想像をはるかに超える深さと広さで社会に巣食い、それが早晩解決されるなどということは到底望めそうもないという現実である。しかし、それと同じくらい、もしくはそれ以上に驚きを覚えるのは、様々な圧力や不当な非難を物ともせず、アメリカ社会の闇に真正面から取り組む映画がアメリカ人自身の手によって製作され、それが全世界に配給され、そして、言語や文化の壁を軽々と飛び越え多くの観客を引き付けてやまないという、もう一つの現実である。アメリカはなぜそこまで「光」と「影」が極端な国なのか？ 不思議なことに、アメリカのことを考えると、結局はいつもこの疑問に行き着いてしまふ。

アメリカに似合うのは、忌まわしい苦悩だけでもなければ、輝かしい栄光だけでもない。アメリカには、「苦悩」と「栄光」の両方がよく似合う。でも、この頃のアメリカのやり方はあまりにも傲慢で、今後「苦悩」ばかりが増え続けるのではないかと……。

（みなと かずき／アジア経済研究所地域研究センター）